

大井町立大井小学校

研究テーマ：子ども自らが問いをもち、学び合い、深め合う授業をめざして

1、実践の目的

目的は2つ。1つは学校教育目標の実現。もう1つは、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善である。前者については、「『自分づくりに励む子ども』『未来づくりにかかわろうとする子ども』の育成」という学校教育目標の具現化を目指して、「納得解が得られる授業づくり」と「向社会的行動につながる授業づくり」に取り組む。納得解を得るための「問い」と、向社会的行動につなげるための「学び合い」を軸に、校内研究を推進する。後者については、算数と道徳を中心に学校全体で授業づくりの視点を共有し、授業改善に努めていく。

2、実践の内容

(1) 研究の重点

① 子どもの「問い」の具現化

「問い」をもつ子どもとは、どのような姿を捉えるのか。その部分を、算数と道徳のそれぞれの教科で追究した。

まず初めに、子どもが「問い」をもつのは、安定した状況から不安定な状況に置かれた時だと考えた。例えば、算数では、既習から少しジャンプした未習の問題に出会う時や、予想と違う答えに出会う時などである。一方、道徳では、当たり前前と思っていた価値観が揺さぶられた時や、自分と異なる意見が出た時などである。このように、“安定からの不安定”をキーワードにして、「問い」の姿を具体で明らかにしようとした。

② 「学び合い」に向けた教師の関わり
充実した学び合いを目指して、聞き方や話し方（説明の仕方）の指導のポイントや効果的な声かけなど、教師も学び合う一人としてその関わり方を追究した。その中で、子ども同士をつなぐコーディネーターとしての役割が重要であることを見出してきた。

③ 一人一台端末の活用事例の共有
ICT 機器を実際に活用した事例を集め、職員間で共有した。特に、道徳の授業では Google Forms を活用したアンケートが有効であることが分かった。

(2) 全体授業研究

研究授業では、子どもたちの言動やそれに紐づけられた思いの読み取りを大切にした。協議会では、付箋紙を用いながら「問い」と「学び合い」の2本の柱について、具体的な子どもの姿と教師の手立てについて議論した。協議の最後には、明日の授業に生かしたい内容をグループで相談し、キーワードにして全体で共有した。

算数では東京家政大学教授 石田淳一先生を、道徳では昭和女子大学現代教育研究所 高木くみ子先生を講師にお招きし、ご指導いただいた。算数では、「学び合い」を深めるための指導や数学的な見方・考え方について、道徳では、「問い」のある授業展開や価値に迫るための具体的な手立てについて学ぶことができた。

(3) 研究推進だよりの発行

研究推進だよりの「問い」と「学び合い」のある授業の実現に向けた改善の視点などを発信した。具体的には、「問い」と「学び合い」に関する子どもの具体的な姿や授業づくりにおけるしかけや発問の工夫などである。これらの内容を継続的に発信することで、学校全体で同じ方向を向いて研究を推進できるように努めた。

3、実践の成果

(1) 「問い」の捉えと教師のしかけ

研究授業や職員間での対話を通して、「問い」を次のように捉えた。

はっきりしたい、解決したい、考えてみたい、聞いてみたいなどの「～したい」につながる主体的な追究を引き出すもの

そして、具体的な子どもの姿を次のように出し合い、職員間で共有した。

算 数

- 習ったことが使えないかな？
- 予想していた答えと違うのはなぜ？
- 友達はどう考えたのかな？など

道 徳

- 友達はどう思っているのかな？
- どう考えたらよりよい生活ができるかな？
- 今までの自分はどうだったかな？など

それから、これらの姿を生むためのしかけとして、次のような教材の工夫や発問の工夫を見出すことができた。

算 数

- 予想と違う結果が得られる教材
- 既習との違いが明確に分かる教材
- 異なる考えに出会える教材 など

道 徳

- どちらつかず（本音 or 建前）の状態に導く発問
- 子どもの中の当たり前を覆す発問
- 別の視点から考えることを促す発問
- 実態を知るアンケートの活用 など

(2) 「学び合い」の捉えと教師の出場

「学び合い」を次のように捉えた。

子どもたち同士、かつ教師との関わり合いの中で、互いの考えを交流させ、聴いて考えて伝え合うことの繰り返しを通して、考えが深まったり広がったりして変容していくもの

そして、授業を通して見えてきた教師の出場について次のように整理した。

算 数

- 本時の問いを焦点化、共有したい時
- 確実に全員に理解させたい時
- 数学的な見方・考え方を広めたい時
- 個の変容を全体に広めたい時

道 徳

- 子ども同士の意見をつなぎたい時
- 議論する視点を切り替えたい時
- ねらいの価値に迫る意見がほしい時
- 子どもの本音を引き出したい時

(3) 子どもの変容

「問い」と「学び合い」の実践を積み重ねることによって、主体的に学習に取り組もうとする姿に成長を見出すことができた。算数では、受動的だった子どもたちが少しずつ能動的に動き出すようになった。例えば、「場合の数」では、教師の指示がなくても、人数を増やした場合を進んで考え始める姿があった。家庭学習においても、授業を延長した内容で自ら問題を変えながら学習内容を確認したり、次の授業の予習をしてきたりする子どもが増えた。道徳では、ねらいとする価値について考える中で本音を素直に語り、自己を見つめながら葛藤し続ける姿を見ることができた。

4、今後の展開

対話を通して、本校の子どもたちに必要な資質・能力を明確にし、研究の視点をより焦点化する。そして、一人ひとりが目的をもって日々の授業を行えるようにしていく。